

「ある ある ある」

作：平野俊興

語り：田口トモロヲ

『さわやかな 秋の朝
短いけれど 指のない
まるい つよい手が
何でもしてくれる
断端（だんたん）に骨のない やわらかい腕もある
何でもしてくれる 短い手もある
ある ある ある
みんなある さわやかな 秋の朝』

これは、「ある ある ある」と題した、
中村久子さんの詩の一部です。
著者の中村久子さんは、幼くして両手両足を失いました。
文中ある「断端^{だんたん}」とは切除された端^{はし}を意味します。

どんなに時を経ても、
つらい人生を歩んだ人の言葉は胸を打ちます。

「ないこと」の不幸を恨むのではなく、
「あること」を見つけて喜ぶことが大切で仕合わせであると、
教えてくれます。
両手両足がないという事実を、
「与えられた身」として生き抜いた中村久子さんを、
あの三重苦のヘレン・ケラーは、
「私より不幸な、そして偉大な人！」と讃えました。

ついつい「ある」ことを忘れて
「ない」ことに心を向けてしまいます。
だから落ち込んだり苦しんだりするのです。

アナタが苦しんでいるとき、心配してくれる親がいます。
アナタが悲しんでいるとき、一緒に悲しんでくれる友達がいます。
おじいちゃんもおばあちゃんもいます。
必ず、必ず誰かがいることを思い出してください。

そしてアナタが楽しかったら、

一緒に楽しいと思う親がいます。友達がいます。
おじいちゃんもおばあちゃんもいます。
アナタの笑顔がみんなを仕合わせにしてくれるのです。

私たちは多くの目に見えないものによって、
繋がりながら生きています。
あらゆるものに支えられ、助けられて成長していくのです。

「ない」ことを嘆くより、
「今ある」ことに感謝できる、
そんな人になってほしいのです。

「ある ある ある」